

面（おもて）の現れ

アベル・コエリョー『十一面ハムレット』

奥田浩貴

舞台はピアノによる音楽、振り、そしてシェークスピアによる“Hamlet”第3幕1場‘to be, or not to be : that is the question’から始まる一連の台詞が基礎になったものの3要素で進行し、それらを4度反復する構成となっている。照明は上手、下手から舞台を隈無く照らしている。舞台上での足取りは、長方形・その対角線を利用した動きであり、反復性は機械的でもある。しかし各フレーズは各々異なり、繰り返される毎に苦悩が増していく構成となっている。Hamletの場合は狂気と見做された道化を装ったのに対し、本公演では幾度も装いを剥ぎながら、狂気にも接して行くのである。

一連の始まりの作舞では、左手で何かを掬い上げて顔に塗りつける、あるいは同化させる、その後前方へ進みながら平手の人差し指を額に打ちつける点で共通している。新しく湧き上がって来た面を装着し、進んでそれを割ろうとする記号とも捉えられる。‘to be, or not to be : that is the question’に関する台詞、則ち原本となる戯曲の翻訳は各々変化し、時折翻訳されない原典となる英語での台詞も織り交ぜられている。3度目のフレーズの際には「生きるしがらみ」「どんな夢を」と声を発し、力をなくしてピアノに凭れかかりながら演奏を中断、4度目のフレーズの際には演者が発する声は、もはや識別困難な言語となり、3音ずつに刻まれた音となる。意味が確定した言語体系から逃れ、空虚な声を発することで観客に新たな栄養を生み出しているのである。ここでは、主役=ダンス/脇役=ピアノ伴奏という明確な序列と区分によって公演が成立しているのではなく、中断したピアノが残す音の余韻も、言語として認識できない声も‘poly_phony’を形作っている。

演者によると、タイトルは「十一面観音」にも由来するという。無名煩悩という多様な顔を頂く仏としてのみならず、姿形が表されていなかった八百万の神の偶像としても、混淆し再構成されながら古来「日本」各地で「面（おもて）を打たれて」来た。それらは、仮面=偽の覆いと素顔=本物という区別以前としての現れなのである。面を割る様な作舞、走っては「何か」を祓い退け、取り祓い両手で頭上から投げる様な作舞には、苦悩を伴いながら、新たな意味を見つけては固着してしまった記号の牢獄から逃れようとする意図をも汲み取ることが出来るであろう。割った面の裂け目からは、新たな面（おもて）が現れてくるのである。

韻を踏むかの様に4度に渡って反復するPhraseは、17世紀から現在に至るまで世界各地で上演・批評（批判）という解釈をなされてきた“Hamlet”の代表=再-上演として各々並置される。そして同時に、時間の経過と共に増える解釈数に比例して増大する、新たなPhaseを生み出す苦悩も現している。「事実」を告げる「実体のない父なる亡霊」をいかに解釈するか、先にあるものをいかに解釈するかによって、物語の流れは新たな様相（おもて）を翻すであろう。固着した記号をtombに埋葬しながら、対位法の発達した時代であるゴシック建築宜しく、異端的要素を排除せず「生きた」旋律を協調させることが期待される。

(1238字)